

3. 幼児への漢字教育の考え方

すべきことに漢字を使う

漢字教育と言うと、すぐ漢字の詰め込み教育だと思われるところから、言下に「とんでもない」と言って否定されがちです。

また、「漢字教育より先に、すべきことがある」とも、よく言われます。これに対して私は言うのです。

「先にすべきことがあるなら、それを先にやってください。ただ、そのすべきことに漢字をお使いください。“漢字で教える”のです。漢字で教えた副産物として、幼児が漢字を覚えることを期待しているだけです。ですから、覚えなくても一向にかまわないのです。しかし、例えば覚えなくても、見せておけば、それだけのことはあろう、と考えているのです」

“ローマは成るの日に成るにあらず”です。漢字もまた読める日の前に、読めないけれども、読めるための下地となる“読み”がなければなりません。

“漢字で教える”教育とは、そういう下地になるためのものです。

繰り返して見る幼児の喜び

私たちは、“容易に覚える”ということ、安易に喜んでいては間違いです。幼児は、気が向けば(“関心”を持てば)どんな漢字でもいっぺんに覚えてしまいます。しかし、容易に覚えたものは容易に忘れることも、免れがたい事実です。

なかなか覚えなかったが、ようやく覚えた 　　こういう覚え方をした場合は、容易に忘れないものです。記憶が長持ちすれば、その間にまたその漢字に出会う機会にぶつかって復習しますので、さらに記憶は確かになります。そう考えると、「物覚えの悪い子は幸いなり」と言えそうです。

覚えようと覚えまいと、忘れていようと忘れていまいと、とにかく使う機会があったら、一つの漢字を何回でも繰り返して提出し、読む機会を与えることが必要です。

「皆、よく覚えたから、もうよかろう」 　　こうした考え方は、漢字教育に関する限り誤っています。つまり、「皆、よく覚えたから、よけい使ってやろう」でなければいけません。

漢字は、“覚える”ことが目的ではなく、“覚えた”あと、“使う”こと、“読む”ことが目的です。幼児が覚えたからこそ、私たちは、幼児に対

して漢字を本当に“使う”ことが出来るわけです。

つまり、親も教師も、幼児に漢字を使って見せる機会があったら、何でもかんでも使って、幼児に漢字を読ませる機会を出来る限り多く作ることです。

幼児は、その重大な特性の一つとして“繰返し”が好きだ、ということがあります。三歳ぐらいまでの幼児は、繰返して飽きることを知りません。ですから、幼児の好むお話には、必ず繰返しがあります。幼児がその繰返しを好むから、そういうお話が昔からずっと語り継がれて

きたのでしょ。

「桃太郎さん、挑太郎さん、お腰に着けたものは何ですか」に始まる問答は、三回繰返されます。この三回繰返されるところが、幼児にはたまたまなく快い聞きどころなのです。そして、繰返しのある物語を、幼児は、繰返し繰返し聞くことがまた、この上もなく好きです。すっかり覚えてしまっても、なおそのお話をせがむほどです。

こういう幼児のことですから、漢字の反復提出もまた大歓迎します。「よく覚えてしまっているから、もう面白がらないだろう」と気を回して反復を遠慮するのは、大人の間違った分別で、幼児は、「よく覚えて知っている字だから、得意になって読む」のです。

この“繰返し”を好む性質が“心の若さ”の正体です。精神が老化していきますと、“繰返し”がたまたまなくいやになってきます。

ですから、肉体は、これを使うことによってその若さを保つように、我慢して幼児の相手になり、“繰返し”を繰返しやることは、子供のためでもあり、大人が自分の“心の若さ”を保つのに役立ちます。

コラム

部首 戠

戠は、戠で才と戠(ほこ)との形声字。才は“断ち切る”意味を表した言葉。従って戠も、“断ち切る”が本義の部首。

【裁】 衣類を作るべく布を“断ち切る”のが本義。一旦裁断すると変更ができなくなるので“最終的な決着をつける”ことを「裁断」というようになった。

【栽】 木をりっぱに育てるべく、むだな枝を“断ち切る”のが本義。転じて“木を植える”意味にも使う。

たくさん覚えるほど良い効果

幼児の漢字教育で、幼児があまりよく漢字を覚えるので、「こんなに出来るようになって、小学校

の漢字学習がつまらなくなりはないだろうか」と、心配されるお母さんや幼稚園の先生がよくいらっしゃいます。

これもまた、老化した心で、若々しい心を推量るところからくる見当違いです。

すでに述べましたように“若い”幼児の心は、繰返しを飽きるどころか歓迎します。それに、“出来る”から楽しいのです。出来て楽しいから、気に入った遊びに夢中になるように一所懸命にやります。一所懸命にやるからますます能力が向上します。

私は、小学校の一年生をたびたび指導していますが、漢字の書き方練習の時、わき目も振らずに書いているのは、必ず上手な子供です。

上手に書ける子は、それほど一所懸命にやらなくても好いと思うのに、一所懸命にやり、下手な子は、一所懸命にやってほしいと思うのに、一所懸命になれないのです。

成功の喜び、うまく書けたという喜びを知らない子供には、それを

求めて努力するだけの意欲が燃えないのです。下手だからこそ練習しなければいけない、ということがよく解る私ども大人でさえ、やっぱり下手なことはつい億劫になるものです。

幼児も、漢字が得意になればなるほど、小学校へ行ったら、解る楽しさから、なお一所懸命勉強します。出来過ぎによる心配など決して

コラム

部首 肖

肉体の意味の月と小との会意形声字。親と子とは、肉体の大きさ以外は顔形、話し方、癖までよく似ているという意味で、“似る”を表した字。部首としては“小さい”の意味。

【消】 “小さい”意味の肖と水との会意形声字。“水が少なくなる”こと。転じて全ての物が減少する意味となり、今では“きえる”意味。

【硝】 “水につけるととけて消える石”という意味で名付けられた「硝石」のこと。

【宵】 “家の中の人が皆似て見える”という意味で、“暗くなった”ことを表す。「夜」や「夕」が自然現象の。“よる”を表すのに対し、宵は人間生活の感情が込められた“よる”のこと。

ありません。“出来なくて困る”これこそ本当に困った悩みです。

と言うのも、出来ない子は、一番励みになる成功の喜びというものを知りませんので、やる意欲が出ないからです。やっても楽しくならないのです。意欲のない者は、何をしてもうまく出来るはずがなく、楽しくなるはずがありません。こうして悪循環が始まるのです。

悪循環はとこかで断切らなければなりません。そして、どこかで好転すれば、全体がうまくいくようになるのです。例えば何かで褒められた、ということで“いい気持”になれた。そこで子供に“やる気”が出た。そのため、今までより良く出来た。それがまた認められて褒められた。これで、良い循環軌道に乗ったわけですが、こうなれば、もうあとはどんどん向上の一途をたどることになります。

確かに、この図式通りに軌道に乗せることは、実際にはなかなか容易ではありません。しかし、子供の長所を見付け出し、子供の能力を引出すことが“教育”だと考える大人なら、やはりこの軌道に乗せる努力をしなければなりませんし、努力すれば必ず実りは期待できます。

ポイントとなる言葉を漢字で示す

前に、「漢字教育より先にすべきことがある」という批判をする人が多いけれども、それに対しては、「漢字教育は、先にすべきその教育

を漢字ですることです」と答えていると申しました。“先にすべきもの”とは、集団の中での幼児の生活の確立とか、情操教育とか、そういうことを指しているのかと思います。

ところで、私たちのいう漢字教育というのは、漢字そのものを教えるのではなく、右のようなことがらを指導するに当って、そのポイントになる言葉を漢字で示しながら話を進める教育のことです。

例えば、廊下や道路での“右側通行”の話をする場合でも、ただお話をするよりも、これらの漢字をカードに書くなり、黒板に書くなりして、聞いている子供たちにこれを見せながらお話をするので。

子供たちに身近なことがらを表すこの程度の漢字は、ほとんどの子供がすぐに覚えます。また話そのものも、ただ話した場合よりも、漢字が示されたことによって、子供たちの意識を集中させ、話の内容を鮮明に印象づけます。

しかも、その翌日、これらの文字を漢字カードなり黒板に書付けるなりして見る機会を与えるならば、特に指導しなくても、無言のうちに、前日の“右側通行”の話が子供の心によみがえり、ひとりで復習され“右側通行”の生活指導が徹底されるのです。